

平成五年四月十八日 和敬塾入塾式記念講演

## 「世界の中の日本」

京都大学教授 矢野暢先生

私は大変古いタイプの人間かもしれませんが、今日ここにこうして参上いたしましたのは、和敬塾にお礼を申し上げに参ったわけです。昨年三月、私どもの京都大学の研究所が東京で研究会を開く際、会場がなくて本当に困っており

ましたが、やはり昭和二〇年だったということを再確認いたしました。西暦でいいますと一九四五年、私はそのとき満州におりました。大連でございませう。

ました。そのとき、和敬塾の方からどうぞ教室を一つお使い下さいということで快く使わせて

いただきました。しかも無料でございました。こういう御恩というものは、しかと重いものでございまして、私としてはどうお返ししていいかというのを思い悩んでおりましたところ、もしよろしければ一度講演願いたいとお話がありまして、私ですむことならと、浅学非才を顧みず、こうやって今日お礼に参上したわけです。皆さまに厚くお礼を申し上げます。

今は「中国の東北部」などと言っておられますけれども、実は満州というのはれっきとした世界であります。それをあえて中国政府の言いなりに中国の東北部などと呼んでおりますが、学問的には改めていう必要もないほど、満州というの

うのことは一つの世界であり、これは満州族の世界です。中国は漢族が支配する世界ですけれども、歴史的に見ますと一時期、満州族が漢族を支配していた時期があるわけ

です。中国は漢族が支配する世界ですけれども、歴史的に見ますと一時期、満州族が漢族を支配していた時期があるわけです。いつかと言いますと実は清朝でございませう。ついこの間まで続いておりました清朝が、実は満州族の支配の時期でありました。その最後の皇帝をつとめたのが、映画になりましたラストエンペラーであるわけ

です。ここで満州族の国が作れる、そして漢族の中国とのバランス・オブ・パワーの関係ができると、まあ一種の日本らしい内政干渉だったのですけれども、作った国が満州国という国で、ラストエンペラーがもう一回皇帝にかつがれて満州国皇帝になったという、そういう曰くの背景がある、これが満州国という国であった。

きまして、私の五十七歳の誕生日でした。五十七年の人生の中で一番思い出深い年はいつだったかなどと、いろいろなことを考えてお

いたのですが、実は満州族の支配の時期でありました。その最後の皇帝をつとめたのが、映画になりましたラストエンペラーであるわけです。ラストエンペラーは清朝が滅びますと満州に戻りました。そして満州に戻ったそのラストエンペラーに着目したのが日本で

と。ところがその満州国という国は、ご存じのように建国に日本が大きく関わったことから、多くの日本人がそちらに参りました。私の父も実は教育者として満州にわたりました。そこで、私は大連で育つことになったわけです。そこで、昭和二〇年八月十五日の終戦の詔勅のことは、私は子供ながらによく覚えております。その後いろいろなことが起こりましたが、まず起こったことは、家を追い出されたこと

あります。そして場末の汚いところに全く見ず知らずの日本人の別の家族と一緒に住むことになりました。父も職業を失いました。私も学校へ行けなくなりまして、教科書もなくなりました。

期でありました。その最後の皇帝をつとめたのが、映画になりましたラストエンペラーであるわけです。ラストエンペラーは清朝が滅びますと満州に戻りました。そして満州に戻ったそのラストエンペラーに着目したのが日本で

す。ここで満州族の国が作れる、そして漢族の中国とのバランス・オブ・パワーの関係ができると、まあ一種の日本らしい内政干渉だったのですけれども、作った国が満州国という国で、ラストエンペラーがもう一回皇帝にかつがれて満州国皇帝になったという、そういう曰くの背景がある、これが満州国という国であった。

要するに、何もなくなったということであり、家族全員で売り食いしながら日本へ帰る日を待つという悲惨な状態が始まったのであります。満州とか外地におられた方は、皆似たような経験をされたわけでありませうけれども、私にとっては昭和二〇年という年は、大きな苦い、悲しい、わびしい思い出として死ぬまで恐らく忘れないだろうと思うわけでありませう。

ここにお若い方が沢山おられますが、皆さま方の人生においてもやはり、そのような一生忘れ難い歴史の断絶点というのでしょうか、必ずあるはずで、歴史は決してすくすくと育つ木のように円滑に流れるわけではない。歴史というものをあまり信じてはいけません。歴史は時には人間を裏切る、人間を苦しめることもあるわけでありませう。昭和二〇年に私はそういう苦い体験をほかの日本人とともにいたしました。全ての日本人にとって、昭和二〇年の敗戦というのはつらい出来事であった。今、生きている日本人の多くの人はその体験をもっていると思います。

日本が戦争に負ける、しかも世界大戦に負けるなどということは、空前の出来事でありました。負け方を知らないぐらい日本人は戦争に負けたことがなかった。負け方を知らないというのは変な言い方ですけど、戦争というのは勝

てばいいというものではないのです。勝つ時もあるれば負ける時もある。負ける時にはうまく負けなければいけないのですけれども、初めて負けるわけですから、昭和二十年の負け方は実に下手でありました。負け方が下手だったからこそ、今頃になって憲法問題とか自衛隊問題とかいろんな問題が出てくるわけでありませう。負けるということとは頭を丸めて、もうとにかく総懺悔して一切を捨てて敵の言いなりになることであると日本人は思ったのでしょね。だから憲法もアメリカ人に書かせたし、教育もアメリカ人の手に委ねてしまった。いろんなものを勝った側に委ねてしまつて、今になってそれがおかしいということになってきているわけですが、おかしいのは当たり前であります。要するに負け方が下手であったわけですから、そんなことはともかく、昭和二〇年という年は誰にとつても大きな出来事であったということは、皆さまもお認めいただけるだろうと思います。

そのような大きな出来事は、つまり歴史が変わるほどの大きな出来事というのは、日本の近代史においてどのくらい起こっているのだろうかを考えてみたい。もちろん一八六八年の明治維新というのは大きな出来事でありませうが、残念ながらここにいらつしやる方は、どなたもこの時代は生きてなかつたわけで、もう過去の歴史であります。とにかく、明治維新という

は大きな出来事でした。これははっきり言って、鎖国をしていた日本が開国に踏み切つたということと同時に、幕藩体制が崩壊し、そして新しい廃藩置県によりまして近代国家を持つという、一種のやはり国家変革であつた。土農工商制度が廃止されていわゆる武士階級という支配層がなくなつていくわけでありませう。

その次にいつ何が起つたかと考えてみますと、日露戦争がそうなのです。日露戦争と言ふと、皆さまは何か日本がロシアに勝つた戦争と思つておられるでしょうけれども、必ずしもそうではないのです。日露戦争は、大変苦戦した戦争でありました。私の祖父がまだ健在だった頃、「勝つた勝つた、また勝つた」なんて酔つ払つてよく言つていました。「おじいちゃんそれ何だ、『勝つた勝つた、また勝つた』つて、これは日露戦争の歌だ」というわけですね。私は日露戦争とはそんな戦争だと思つていた。野球でいうと、十五対〇でこっちのピッチャーが完投して相手をシャットアウト、こっちはもう満塁ホームランが二本も出て楽々勝つたというような試合のように私は聞いていたのであります。その後、私が学者になりました、京都大学法学部で日本外交史を教えるようになり、いろいろ勉強しましたら、どうしてどうして、日露戦争というのは野球でいうと、そうですね、九回の表まで六対七で負けていて、九

回の裏にやつとツーランホームランで逆転勝ちしたというような、そういう戦争だった。一点差でかろうじて勝った試合である、そういう感じですよ。

戦争というのはことごとく限定戦争であり、戦争を無限戦争として戦う馬鹿はおりません。百年かかろうが千年かかろうが戦い続けますよなんて、そんな戦争はない。戦争として事業であります。事業である以上は、予算が必要であります。予算には限度がある。それから、事業である以上は、建物を建てる工事期間と同様に、この戦争は何年やるけど何年たつたらやめようと、必ず時間の限定がきます。予算の限定だけではない。それから戦争はどこを戦場として戦うか、戦場の限定とか、いろんな限定がついて行われる。戦争はことごとく限定戦争である。

日露戦争は典型的な限定戦争でありまして、時間、期間の限定をはじめは一年間でした。予算の限定はこの年の国家予算の三倍までという限定でありました。三倍でも大変ですよ、一年間の予算の三倍もかける。本来の年度予算以外にかかるわけですから、お金をどこから調達して来ないと、そんな金は普通ないのです。次に戦場の限定、戦場は日露戦争といいながら日本とロシアを戦場としないという面白い戦争です。どこを戦場にしたらかというと、先程話

のはじめに伏線として申し上げました満州、中国の東北部ですね、これは中国の領土です。だから他人の土地で戦争をする、借地戦争という面白いことを考えたのです。日露戦争といいますと日本軍がロシアに攻めていき、ロシア軍が日本に攻めてくるという語感であります、それをやっていないのです。

そういう面白い形で限定戦争が始まりましたが、まず予算は一年間の国家予算の三倍までというのが、七倍、八倍になってしまいました。そして、期間の限定一年間というのが一年たつてもまだ奉天会戦の前で、戦線は膠着したままという有様。そして戦場の限定だけは辛うじて守られてはいるが、予定したような北への進攻ができない。旅順、大連ぐらいで止って時間が空費され、ロシアになかなか近づけない。そうこうしているうちに一年過ぎてしまう。一年過ぎたところで、これは勝ち目がないと日本の政府は判断するわけで、裏で和平交渉に入るのであります。一方で戦争を続けながら、他方ワシントン舞台に外交交渉を始める。しかしロシアは全然応じない。それで、ほっておくと日本はとんでもないことになるという事態になったわけです。非常に暗いムードが日本に出てくる。ところが当時はことごとく極秘で行われておりましたものですから、日本が負けかけているとか、弱っているということは国民は知らな

かった。先程私が祖父の言葉として言いましたように、「勝った勝った、また勝った」と思っていた。これは日本人の悪い癖であります。客観的な状況認識能力がない。日本人はそういう情報操作に弱い。ですから、間もなく日本が圧勝してウルル山脈からこつちは全部取れるという、そういう夢をどんどん膨らましていくわけです。

ところが運がいいことに日本海海戦となりまして、バルチック艦隊が北欧のほうからはるばるやってくる。バルチック艦隊は、日頃ここに居るかといえますとバルト海でして、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーなんかがあるところの海です。フィンランド沖なのです。もう少しわかりやすく言いますと、バルト三国が面している海が、バルト海。あそこからずっと日本に来ようと思つたら、まずバルト海を出ますと、デンマーク、オランダ、それからフランス、イギリス、それからさらにスペインを過ぎまして、アフリカ大陸をずっと下がってアフリカ大陸の南端を回ってやがてインド洋に入り、インドの沖を回ってシンガポールに来て、シンガポールから東南アジアをさらに抜けて香港、台湾を過ぎてくるわけですから、とてつもない長旅をする。大航海は、軍艦に乗っている人達を疲弊させます。精神的にノイローゼになります。そういうバルチック艦隊をなせこつ

ちによこしたか。それしか海軍がなかったからです。ロシアは極東艦隊とバルチック艦隊と両方持っていたが、極東艦隊はすぐつぶされてしまった。したがって大変強いバルチック艦隊をこつちに回したのですが、それが失敗でありまして、結局、日本海海戦でロシアの海軍が全滅する。しかし、ロシアは負けたのではない。ロシアはそのときやつと和平交渉に乗る気になつたのであります。それまで拒んでいた和平交渉に乗って、やつとポーツマス会議ということ

で戦争が終わるのですけれども、ロシアは負けただと思っていない。だから和平交渉になつただけけれども、日本が要求したものは全部はねつけるわけです。俺たちは負けていない以上、日本に何一つやる必要はない。ということで日本人が夢見ていたロシアの三分の一くらいとろうとか、多額の賠償金をとろうなんていう思惑は全部はねられたわけです。それでかろうじてもらったのが樺太の南半分と、旅順、大連のあります遼東半島、つまり関東州、そこをもらったわけでありまして。ほんのちよつぴりもらつただけでお金はほとんどもらえない、なんのために戦争したかわからないという戦争だった。その戦争が終わつたのが明治三十八年、一九〇五年であります。

一九〇五年、この年は東京に戒厳令が敷かれております。日本に戒厳令があれだけ長期間敷

かれたことは初めてであります。四カ月ほど戒厳令が敷かれました。なぜかと言いますと、東京で暴動が起こつたのです。東京全土で暴動が起こつて、日本の負け方はけしからんと、柔弱外交である、せつかく戦争して勝つたのに、ロシアから何も取れないじゃないかと、大暴動が起こりまして、東京都内の交番所の七割以上が丸焼けになりました。七月の出来事です。それから秋口の十一月まで戒厳令が敷かれまして、軍隊が配置されて東京が管理されるという異常事態になつた。当時の内閣は桂太郎内閣。桂太郎は人物としてはあまり大した人ではない。桂さんがもう一つ同時にやったことがある。先程言つたように領土がほとんど取れないのに辛うじて取つた領土。大連、旅順がある遼東半島、関東州というものを日本が取つたときに、世界一周鉄道の夢を持っていたアメリカの鉄道王ハリマンという人が、ここを起点に鉄道をずつとヨーロッパ、アジア大陸を横断して張れたらいいと考えて、戦争が終わつた後すぐ東京に来ました。ハリマンは桂総理大臣と会います。勝つてロシアからとつたあの鉄道を売っていただきたいと申し出た。そしたら、桂というのは面白い人でありまして、売りますよといったのです。ハリマンはうれいしい思いでワシントンに帰つた。

ところが入れ違いにポーツマスから、小村寿

太郎外務大臣が帰ってくるわけです。当時は船ですから、今みたいに昨日出発した宮沢さんがもうワシントンでテレビに映つて日米首脳会谈をクリントンとやっているような、あんな早いことはできない。船で行つたり来たりしてますから、タイムラグの問題が非常に深刻な時代でありまして、ハリマンが去つた後に小村寿太郎が帰つてきてこの話を聞くわけです。小村寿太郎は激怒いたします。自分が体を張つて取つた領土、わずかばかりの領土かもしれないけども、その領土をおめおめとアメリカに売つてしまふとは何事だと、撤回してくれということ、外務大臣が総理大臣に迫るわけです。総理大臣のくせして弱いもので、おたおたしてしまひまして、そういえばあなたの言うことは正しいということ、今度はハリマンに電報打ちまして、このあいだ決めたことは、白紙に戻していただきたい、キャンセルしていただきたい、つまり売らないと断つた。これで今度はハリマンが怒り狂うわけです。ハリマンはアメリカの政府に顔の利く人でありましたから、アメリカ政府も巻き込んで怒るわけです。反日感情が出てまいります。

そういうこともあつてこの一九〇五年という年は大変な年でした。ところが、大変な年だということ意外に日本国民は感じてない。そういう裏話を知らない。しかし政府関係者は知

つていた。ですから日露戦争が終わった時、実は喜ばなかった。これではだめだと、こんなだらしない日本ではだめだということである。いろんな秘密会議が行われまして、いろんなことが決まるのであります。

まず第一に軍備拡張計画、こんな弱い日本では到底だめだ。特に海軍力はまだまだ足りない。どこが問題かといいますと、海軍の船はそのころは海外から買っていました。主としてイギリスから海軍の船を買っていた。外国から船を買うとどうなると思いますか。外国に発注する訳ですから、外国の造船所が軍艦を造る。完成するとその船が、アフリカの沖からインドの沖を回って、デリバリーに二カ月くらいかかるわけです。この間、隠すわけには行きませんから、船がずっとわたって来るのを、敵のスパイが見てるわけです。ぴかぴかした新しい日本の船が今、アフリカ沖を通ったなどと、情報は筒抜けです。軍艦は、これは軍事用の船でありますから、そう簡単に秘密が漏れては困るのに、外国で船を造りますと人の目に平気でさらしてしまう。そのようなことで、日露戦争が終わったときに、そろそろ海軍の船は日本で造ろうではないか、自前で造ろうではないかということ、初めてそこで海軍の船を自前で全部造ることになるわけです。そのとき一挙に強化されましたのが呉(広島)の造船所です。

それから二番目に鉄が足りない。当時日本には八幡製鉄所がありました。今の新日鉄でありますけども、八幡製鉄の作る鉄は質が悪く、そして日本が必要とする鉄の量をまかないきれれておりませんので、もう一つ製鉄所を造ろうということ、その時できたのが神戸製鋼であります。

それだけではない。当時まだ日本には国鉄というのがなかった。あるにはあったけれども、基本的には日本はまだ民鉄の時代でありまして、私鉄の鉄道がほとんど大事なところを占めていた。例えばいまの山陽本線はほとんど民鉄でありまして、それを二つ三つの会社が経営しておりますから、物を運ぶときにいちいち途中で、岡山とかで伝票をきりかえないといけない。なぜ山陽本線が大事か。当時日本の兵隊さんは外国に戦争をしに行く時どこから出たかという、実は広島から出たのです。宇品の港から出た。そこまでどうやって兵隊と兵器と糧食を運ぶかというのが、当時の戦争の大事なロジスティック。ところがその肝心の山陽本線がまだなくて、山陽鉄道とか阪神鉄道とかそういう民鉄で握られておりましたから、これではだめだ、これでは戦争できないというので、一九〇六年に、日本政府は「鉄道国有法」という法律を作って一挙に民鉄を買い上げまして、その時に、今はJRと申しますけども、国鉄の

ネットワークができるわけです。そういうことがずつと行われたのが、一九〇五年から六年でありました。

私は先程さりげなく明治維新の話をしました。そして昭和二〇年の話をして、今一九〇五年の話をしました。タイムスパンを測ってみてください。間隔を測ってみてください。明治維新、これは一八六八年ですが、日露戦争があった一九〇五年まで何年でしょう。皆さまは頭がいいからすぐ出ると思います。三十七年です。敗戦の年の一九四五年まで日露戦争の終わった一九〇五年から何年でしょう。四〇年、よく似てますね、スペインが。三十七年、四〇年。これは案外偶然ではないのです。日本の外交史とか日本の歴史というのは意外に四〇年サイクルで変わるんです。これをさらに証明してみましよう。今度は昭和二〇年から四〇年たった年、昭和六〇年ですが、この年には皆さまも生きてました。昭和六〇年は西暦でいうと一九八五年、さあこの年にそのような大きな変動があったかどうか。それが証明できたら、私のこの四〇年サイクル説というのは当たるわけでありま

す。

さあ、昭和六〇年、何があったでしょう。あまりめったに起こらないことが起こっておれば私の仮説は証明されます。昭和六〇年、何があったか思い出してみましよう。わが国でエイ

ズの第一号が発生した年ではありません。それではまだ根拠として弱い。やはり、昭和六〇年に大きなことが起こっています。

まず第一に、その年の三月にゴルバチョフ政権が成立します。もしゴルバチョフが政権をとっていないければ、共産主義の崩壊もソ連の崩壊もなかったでありましょう。その意味で一つの証拠になります。

もう一つ九月、プラザ合意というのがございました。プラザ合意というのは非常に大事な出来事であります。これは円高ドル安への国際協調誘導が始まったことであります。円高が始まりました。それまで二百数十円台をうるうるとしておりました円が、いまでは百十二円とか百十三円という非常に強い国際通貨となりましたが、円が国際的に操作されて強くなり始めたのが、やはり昭和六〇年のことです。プラザ合意というのがなければ今の日本はなかった。今国際化としきりに言うようになりましたが、それも実は昭和六〇年、円高が始まったからです。円が強くなったことで日本の購買力が増えます。日本の援助能力も増えるわけです。日本が一举に国際貢献能力の点で強い国になった。日本史上初めてであります。

まだないかと考えてみますとまだあります。EC統合の内定です。ECの経済統合は今年の一月一日で成立をみました。EC十二ヶ国が一

つの経済共同体を作りました。もはやヨーロッパに行かれたらびっくりされますけども、フランスからドイツに入るにも、どこに行くにも、もうパスポートチェックも何もなくありません。十二ヶ国が一つのゾーンを作りました。まだ国家主権だけは残っていますが、経済的にはほとんどもうボーダーレス、それが内定したのが一九八五年の六月と十二月の理事会であります。最終的には欧州統一議定書という形で翌一九八六年に調印されますけれども、内定したのは一九八五年でした。

その他日本国内でもいろんなことがありました。田中角栄さんの時代が終わったのはその年です。

一九八五年には、このように大きな歴史の曲がり角がきていたのです。もうすでに申しましたように、日本の国際化の始まりでもありません。強い円という空前の条件を日本は与えられ、それをもとに国際化が始まります。従来貿易といえば輸出であって、日本の円が安いものですか、日本の物価が安いと、海外でもものがよく売れるということとほとんど輸出していたのが、今度は輸入した方がいいと、今度は輸入大国に変わり始める。ところが、なかなか、体質的に変わらないものですから、今のコメの問題も残ります。いまだ輸入本位に踏み切れない領域も残りますけれども、いずれにしても日本の経済体質

が抜本的に変わる。

それよりもやはり、ゴルバチョフ政権のもとで、この年の秋からは有名なペレストロイカというのを始めているわけです。共産主義が、そこでがたがた崩れ始めます。多くの人が、一九八九年に世界共産主義は崩壊した、ベルリンの壁がなくなったとかいろいろおっしゃいますけれども、もつと大事なのはゴルバチョフ政権の成立なのです。ゴルバチョフという人間が出てこなければ、あのような大きな変動は生じなかつたのです。その意味で八五年に種が蒔かれたという風に考えていいわけです。

以上、私自身の個人的な体験、つまり昭和二〇年の苦い体験に始まりまして、日本の近代史というものをこう区切ってきましたが、面白いことにほとんど四〇年ぐらいで歴史が変わるということがわかりました。その都度世界の中の日本という意味での日本の位置付け、日本のあり方が変わってきているということを知っていたらだいたいわけであります。

皆さまと一緒に考えてみましょう。明治維新から日露戦争の終わった年までの日本は一体どういう日本であったのか、どういう世界の中の日本という図式であったのかと。これはまあはっきりしてますね。文明開化であります。そのころの日本人はある意味において、一番だめな日本人。だめというのは最も自信を喪失した

時代であります。本当はそれほど自信喪失する必要はなかったのですが、何か日本というのはものすごく取り残された、遅れた後進国であって、早く先進国、つまりヨーロッパ並みにならないとこれは恥ずかしいということで、猫も杓子もみんなヨーロッパヨーロッパと入れあげた時期であります。文明開化というときの文明は、必ずしもヨーロッパ文明のことではないのです。「開化」というのは、自分が未熟である、原始的である、野蛮である、だから我々自身は自己啓蒙を通じて賢くなりましょうという意味です。未開、半開、開化、文明という啓蒙段階がそこでは想定されている。その上で、ヨーロッパ文明をよりどころとして日本人を磨こうという時期がその時期であります。

私は、日本人が自信喪失したということを行いました、そのころに多くの日本のアイデンティティーを日本人は捨てているわけです。ただ明治の日本人のために弁明しておきますが、当時の日本人はすばらしかった。一人一人の日本人は人格的にも、または人物の器量的にも大変すばらしい日本人がたくさん輩出して、今時の日本人とは比べものにならないほどです。それは言えますけれども、総じて言えば、日本人が日本的な文化や制度に対する自信を喪失し、世界の中心をヨーロッパに置き、価値観を全てヨーロッパ的な価値観で統一しよう

とした、そのように社会を運営しようとしたこととあります。

特にアジアを忘れしました。「脱亜」という言葉を作ったのは福沢でありますけれども、福沢論吉が「脱亜論」という作品を明治の一〇年代に書きまして、日本をアジアからきっぱり切り離してしまおう。「脱亜入欧」とも申します。その意味で、当時の理想的日本人像というのは、英語やフランス語やドイツ語をしゃべり、できれば洋行し、そしてフランス料理の通になって、丸善に行つて洋書を買ひ、「あちらでは、あちらでは」と情報をひけらかすような日本人が当時の理想的人間であつたわけです。ばかばかしい話もたくさんできました。当時ある有名な評論家がおりました、その人が何冊かフランスについて本を書いているのです。あの町角の隅っこにタバコ屋があつて、そこをお姉ちゃんは大変きれいな看板娘で、そこを曲がると隣にパン屋があつて、そのパンは朝何時頃行くと非常にほかほかしておいしいと書いてある。ところが、本人は一度も行ったことがない。行ったことがなくても、そのくらいパリの地図を暗記することがうるわしい行為であつた。だから皆さま方にひとつお願いしておきたいことは、明治維新から、一八六八年から一九〇五年までの日本人をどう見るかということ、これからの人生の宿題として考えていただきたいというのが一

つ。

次に、一九〇五年から一九四五年までの四〇年間の日本人、これをどう見るか。これは一種の精神的鎖国の時代でございます。日本主義の時代であります。もう一度地球の中心が日本に戻ります。しかし残念ながら、その時にそのやり方がまずかつた。私が日露戦争というのは非常に重視するのは、日露戦争というのはロシアという国を相手にした戦争だということ、ロシアというのは決してアジアではないのです。ロシアはヨーロッパなのです。日本が戦争した当時のロシアは、フランス語がいちばんしゃべられた時代のロシアでありまして、あれほど文明開化と言つてヨーロッパの国々を仰ぎ見ていた日本が、初めてヨーロッパを敵に回すのが日露戦争であります。それまでは日清戦争、あるいは台湾とか沖繩を攻めていたのでありますけれども、日露戦争からは、とたんに当時の列強と言われたヨーロッパの大国相手に戦争をする国に日本は変わる。その意味で、日露戦争は非常に大きい出来事であつた。ここにおいてヨーロッパを突き放してみる時代にもなるわけです。ヨーロッパを突き放し始めた途端に日本がまた世界の中心に戻りますが、一九〇五年から一九四五年という二〇世紀の前半において、世界の中心であるためにはどういう条件が必要であつたかという点での考えが甘か

つたということでありませぬ。

例えはノーベル賞というものがすでに始まっていた。始まったのは一九〇一年です。もう世界は物理学とか化学とか、そういう科学技術を非常に重視するという時代になっていた時に、日本人はノーベル賞のノの字も知らない。おかげで数十年間、もらえはるはずもない。一人も受賞者が出ない。そしてその間にはロシア革命もあれば、いろんな人権問題も噴出する、労働者問題も噴出する、という時に日本はそういうことはむしろ思想的に裁いて、弾圧して、学ぼうとしない。そしてヴィクトリア女王が死にまして、大英帝国が落ち目になっていって、いわゆる一九世紀後半型の帝国主義はしだいしだいに落ち目になっていくのだけれども、日本は依然として一九世紀後半の、明治維新当時のヨーロッパをモデルにしている。古いタイプの帝国主義をまねていこうとする。強い軍事力、植民地支配、侵略、そういうことを平気でやる。文明とか文化とかいうものをあまり武器に使わない。世界の動向とタイムラグというか、時差があるわけです。その意味で非常に残念ながら、この四〇年間の日本人は世界に通用しない日本人であったという面がある。

ただし、これもまた皆さま方の宿題なのだけれど、一九〇五年から一九四五年、戦争に負けるまでの日本人は全面的にだめであったか

いとうと、そうではないと思うのです。日本が非常に儒教的であった四〇年でありませぬ。儒教を忘れていた日本人がこの四〇年においては非常に儒教的になっております。長幼の序とか、秩序とか、学問や礼節とか、そういうものを重視した。日本人が、個々に見た時に珍しく美しい面をもった時代がこの四〇年でした。それぞれの時代にいい面と悪い面があります。明治時代の日本人を私はほめました。それは国造りをするという大役を負っていましたから、大変な傑物が明治時代に出ております。

私が言う第二期には、残念ながら世界に通用する日本人はほとんどいなかったけれども、儒教的日本人というか、非常にけじめ正しい日本人はたくさん生まれました。ただ、そのけじめ正しい日本人というものがもう少し世界史の勉強とか、国際社会のことを知っておればよかったと思います。しかし、歴史というのはそう理想的にはいかなないので、残念ながら戦争に負けるということが起った。どこに原因があったかというところ、やはり私は、日本人が残念ながら世界を知らなかったと思います。

世界を知らなかった証拠を一つあげましょう。当時はバランス・オブ・パワーの時代です。バランス・オブ・パワーというのはAという非常に強い国が現れると、AをつぶすためにB、C、Dが手を結ぶ。そしてAをつぶす。Aが

ぶれますと今度はBが強くなる。すると昨日の敵は今日の友であります。今度はAとCとDが同盟を結んでBをつぶす。これが自由自在に行われていた時代が、バランス・オブ・パワーの時代であります。日英同盟という一九〇二年に結ばれた同盟は何のために結ばれたかというところ、要するにこれはロシアをつぶすために結んだ。それで日露戦争でロシアが多少後退しますと、今度はイギリスはもはや日英同盟はいらなくなってくる、ということに熱意が冷める。そうすると日本の方は、けしからん、同盟は永遠の契りであるはずなのに、ということに日本人は同盟の打算性がわかりませぬから、日英同盟は悪化していくのです。

さて、そういうバランス・オブ・パワーの時代に日本が最後に結んだ同盟は何だったでしょう。信じられない同盟で終わるのです。昭和十一年に結ばれた日独伊三国防共協定というのが、日本が最後に結んだ同盟であります。昭和十一年は一九三六年です。ドイツはどのドイツか。ヒトラーのナチス・ドイツであります。イタリアは、ムッソリーニのファシスモ・イタリアであります。それと同盟を結ぶところまで来てしまった。これは大失敗でした。非常に損でした。世界で最も嫌われていたヒトラーとムッソリーニという二人の独裁者と日本は手を結んでしまった。とくにヒトラーと同盟を結ん



だことは、当時の世界常識としては許されないことでした。それはもう今の皆さまはよく知ってることです。ヒトラーとはどういう人物であったか。ナチズムとは何であったか。ところが昭和十一年当時の日本の文献をいろいろ調べてみますと、ヒトラーがひどい奴だとか、ナチズムというのはこわい思想だと書いた文献は日本にはまあないのです。それどころか日本から文化使節がどんどん行く。ベルリンフィルという有名なオケがありますけれど、あれを一番最初に指揮した日本人は山田耕筰です。あの「赤とんぼ」など作った有名な作曲家です。山田耕筰が日本の文化使節としてベルリンフィルを指揮しているという記録がある。その程度の認識なのです。まあ一例あげたらそういうこと、つまりバランス・オブ・パワーで最後はババ抜きゲームみたいになかたちでババをひいてしまったという感じですよ。そうしますと、イギリス、アメリカ、フランス、ソ連などの反日感情が深まって当然です。そうしますと、世界中の正義、世界中の良心を敵に回した形になります。無論ユダヤ人はヒトラーが嫌いですから、ユダヤ人をも怒らしてしまふ。そういうことになって、結局日本は世界中を敵に回して孤立して、たいへんな悲劇を迎えてしまうわけです。

その時に日本が本当は信じるべきことができたのはアジアの民であったでしょうけれども、明治の時代に脱亜と、福沢諭吉の言葉ですけれど、脱亜という路線を選んでしまっていた。福沢諭吉の『脱亜論』を読んでみて下さい。四百字で五枚程度の短い文章です。アジアは汚いと書いてあるのです。汚れてる連中とつきあったらこつちまで汚くなるから手を切れと。アジアと書かずに「東方の悪友」と書いてありますけれども。そういう精神での脱亜でしたから、にわかには「アジアは大事だから仲良くしましょうね」と、とってつけたように言ったところで、アジアの人間は日本を信用しない。だから最後になりますと、アジアの民衆が反日蜂起いたしました。日本の軍隊はたたき出されるという形で日本はアジアからも見放されるわけです。もし脱亜がなければ、ひよつとすると大東亜共栄圏もアジアとの関係もうまくいったかもしれない。

まあそういうことで、この第二期の四〇年間はいろいろな問題があります。この四〇年間にについては深く勉強していただきたい。いい面悪い面を勉強して下さい。

そして戦後の四〇年、昭和二〇年から昭和六〇年、一九四五年から一九八五年まで、皆さも生きた、この四〇年はどういう時代でしたか。これは敗戦で全てを失った日本が戦後復興をして、要するに生活の安定を求めてがつがつ働いた四〇年であります。本質的には単純素朴な時代であります。経済復興、経済優先主義の時代であります。お金が全ての四〇年でありまして、おかげで日本は大変豊かになりました。食うに困らなくなりました。しかし国家目標は単純素朴になる。そして国家たるものはそもそもどうあるべきかという国家の総合的な理解すらなくなっていく。国家の安全保障はアメリカに託してしまふ。我々は要するにモノを作つて売つて稼ぐという単純素朴な戦後思想である。

この頃はご存じの通り冷戦でありまして、ソ連という国、あるいは共産圏が目覚ましく台頭いたしました。兵器の進歩もあつて二〇世紀で最も緊張した時代であります。冷戦ですから、戦争はない。熱戦とは違います。戦争の域にまで行かない限りにおける緊張状態を冷戦と言ふわけですが、その冷戦を支えていたのが言うまでもなく抑止力という膨大な軍事力でした。使わない兵器のために膨大な兵器開発費をかけて、絶えず兵器を革新的に変えていくという、全くむだな時代である。そのむだなことが続くはずはないのでして、冷戦が始まったのが一九四七年、昭和二十二年でありますから、これも私の四〇年サイクル説を証明するわけです。四〇年たった一九八七年、昭和六十二年には米ソがいよいよ話し合いを始めて核軍縮に入っていくわけです。冷戦とて四〇年しかもたなかつた。東ドイツ西ドイツが分かれ、そして東ベルリン西ベルリンが分かれたのは昭和二十四年、

一九四九年でしたから、それからちょうど四〇年たった一九八九年、平成元年には東ドイツが崩れ、ベルリンの壁が崩壊している。ちょうど四〇年目に起こっている。昭和二十四年といえど中国に共産政権ができます。中華人民共和国ができたのが昭和二十四年の一月一日です。それから四〇年たった一九八九年、平成元年には六・四天安門事件というのが起こりまして、初めて中国民衆が政府に逆らうわけです。

そのようなことで、四〇年というのは面白い区切りだということがわかっていただけだと思いますが、話をもとに戻しますと、戦後の昭和六〇年までの日本は、精神的にはこれは浅薄な時代でありました。確かにお金は持った。持ったお金がプラザ合意の結果強いお金に変わった。これは大成功であります。だから今や日本の円というのは外交的には武器であります。しかし、たったそれだけのことを実現するために、戦後日本は四〇年間に何を犠牲にしたのか。それを考えてみる必要があります。冷戦の状況において、冷戦というものが本質的に長続きしないものである、やがてこれは崩壊するということを見抜いた日本人がどれだけいたか。それから、他方、共産主義というものが一九世紀の間違った思想であって、それが二〇世紀の合理的な時代においてそう長続きしないということも、もつと多くの日本人が見抜くべきであり

ましたでしょう。ソ連という国が人権抑圧をする独裁国であって、やがて崩壊すると、経済学的にも非常におかしい仕組みを持つているということが、もつと多くの日本人によってもつと早くわかられてしかるべきでした。しかし、単純素朴な浅薄な教養しか持たない日本人はもはや洞察力を持たない。その洞察力を持たない日本人がどんどん増えていったのが、この同じ四〇年間であったという風にも、悲しいかな言えるわけです。その意味で、私は、やはりこの戦後の四〇年に対しても、一面において高い評価をつけますけれども、反面において非常に辛い採点をせざるを得ない。昭和六〇年までの日本が手放しでよかつたと思つては多分いけないのではないでしょうか。

そこで昭和六〇年を迎えて、強い円、それによる国際化などが進み、そして共産主義もはや消えつつある。あの超大国アメリカも弱体化した。新しい世界が誕生しつつある。環境問題とか人工問題とか南北問題とか、従来なかつたような問題もどんどん噴出してきている。昭和六〇年以降、例えば外国人労働者問題などというのも日本にふりかかってきている。円が強いですから、日本にいつてちよつと稼げば、国へ持つて帰ると家も建つ。例えば中国の労働者の平均月収は四千円ぐらいです。月に四千円、年収にして五万円です。いま日本で五万円稼ぐことは

簡単であります。ちよつとバイトしたら五万程度稼げるわけです。多少、体を張るような商売をすれば月に二〇万、三〇万入るわけです。二〇万という金は五年分の、あるいは四年分の年収に匹敵するわけです。家が一軒建つ計算です。そうすると世界中から貧しい国の人々が日本に殺到するのは当然でありまして、外国人労働者問題が発生するのも、この強い円がある限りは不可避的であるわけです。今後もつともつと多くの外国人が円を求めて日本に殺到するでありません。先般発生した、ブローカーが中に入つて船を仕立てて、中国人を日本に連れて来て不法入国させるなんて事件は、序の口でありまして、今後はもつともつと大規模な、不法な人口流が日本に向かいかねません。中国の人口は十二億です。十二億が今地べたにびたつとはりついているからいいものの、今後中国が高度成長を始めますと人口流動が始まります。その人口流は必ず内陸から沿海部に向かいますが、沿海部は世界で最高の人口密度の高いところでありまして。一度上海にいらして下さい。上海に行かれましたらわかりますけども、歩けないほど人間がいるのです。信じられないほど密度が高い。そこへまたどんどん人間が内陸から流れてきている。やがては、船を仕立てて日本へ行けば何かいいことあるらしいと、噂を聞いては流れ始めるでしょうね。

つまり問題はこれから起こるわけで、結局私が申し上げたいことは、昭和六〇年に日本は新しい時代に突入したということです。一九八五年に新しい時代に突入した。もう、しかしながら昭和でもない、平成も早くも五年であります。つまりもう八年たっている。八年たつたわりには日本人は新しい時代の精神、新しい時代の理念、新しい時代の課題というものをまるで考えていない。世界に通ずる日本人を作ろうともしない。世界の中で日本をうまく位置付けようともしない。まもなく二十一世紀が来るというのに、我々はどういうビジョンで日本を導いていこうとするのか、また世界の中で日本はどうやっていこうとするのか。というより、一体どこでだれがビジョンを考えているのだと言いたくなるわけでありませぬ。戦後の四〇年間は惰性で、やたらとよそで小金を稼いでおればそれでよかった。会社がもうかればいい、不景気では具合が悪いから、今度はやはり景気をもとに戻そうと、そういう実利的次元のことだけが話題になっていく。日本という国をどうするか、どういう日本人になるべきか、一人一人の日本人はどうあるべきか、こういう国家社会の常識とすべきものをまるで考えていない。外国のことも知ろうとしない。ジャーナリズムは本当に俗受けするような記事しか書かない、政治家は政治家で、今の自民党をご覧になったらわかり

ますように、政争に明け暮れて、結局権力を失い、そして分解し始めているわけでありませぬ。

今、先進国の中で日本が一番豊かでありまして、国際的責任も一番大きいのでありますが、その国際的責任を支えるだけの政治の形は、今の日本にはありません。非常に今の日本は危険であります。その意味で今急がなければいけないことは、新しい日本像の組み立てでありまして、日本という国、日本という社会、日本人、それをどうもつていくのかという、新時代のビジョンというものが求められているのであります。私は今日わざと話を古くもつていきましました。皆さま方がご存知ない時代のこと話を戻しましたのは、時代がおよそ四〇年ごとに変わつて、四〇年ごとに日本の課題、日本人の姿というのは違っているという事実を知っていたできたかったということです。そして、すでに新しい時代に突入しているのに、政治も経済も、世の中も、教育も学問もみんな眠っているということを言いたかった。

このままでは今の四〇年が終わる年、二〇二五年でありますけれども、その時の日本は惨憺たる姿になっているでしょうし、その二〇二五年以後に来る四〇年間は大変悲劇的な、混乱というか、混乱の日本になるでありません。はつきり断言しますけれども、日本がこれほど強く、そしてたくましく、立派な国としておられる

のは二十一世紀の前半までであります。二十一世紀の後半以降はアジアの中心は再び中国に戻ります。それもはっきりしています。中国は必ずよみがえります。中国はいつまでも今のままでいくと思つたら大間違いです。あの由緒ある五千年の文明を持った中国、それが過去の文明の遺産を生かして、あのエネルギーを生かして、国づくりに成功した時に、中国は見事な文明としてやがてよみがえります。その時日本は、中国の属国の地位にまた戻らないとも限らない。

そのくらい遠い視野まで考えに入れておかないと、日本の国づくりなんかできません。だから時間は限られておりまして、あと百年もないのです。もう五、六十年しかない。この間にアジアの中の日本、世界の中の日本ということを実際に考えて、そして永遠のすばらしい日本というものをどうやって保つていくのかということを考えないといけない。私はともかく、皆さま方若い世代はまだ生きています。だから、大変な責任があります。お若い皆さま方のこの入塾の日にあつて、あえて申し上げたいことは、そういうことを考えていただきたいということでありませぬ。皆さま方の若さというのは財産であり、皆さま方は未来に生きるわけでありませぬ。今に生きています。未来から今に留学しているのでありまして、留学が

終わるとまた未来に戻って行って、そこで皆さま方は活躍されるわけです。皆さま方が活躍される未来のことを今のうちから学んでおくということが実は学ぶということでありまして、未来からの留学生という言葉を差し上げたところでもちよほど時間になりました。

ご清聴ありがとうございました。

(文責 和敬塾)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。